

文における日本語の相

(意味論からの一考察)

ヤンリ

0142041

日本文学部

マラナタキリスト教大学

バンドン

2006

1 ページ

序論

日本語ではアスペクトは相と呼ばれている。安藤貞雄(1986:170)は、

動作、状態が<基準時>に完了しているかいないか（完了><非完了）、または、継続しているかいないか（継続><非継続）と言った、動作の様態を示す文法範疇である。

継続は相の一つである。池上麻希子(1998:59)によると、

未完了相のうち継続動詞に「ている」を接合させて、「電話で話している」のように行為の断続、進行を表す。

そして、町田健(1986:37)では、

この種の動詞の示す事象には開始点と終結点とが明確に存在する。

筆者は継続のアスペクトに興味を持ち、意味論的に日本語の相について分析するものである。

2 ページ

本論

継続動詞＋ている

1. おじいさんは、たくましい日本犬を二頭つれ、古い二連ばつじゅうをかたにして、大またに、のっし、のっしとすぎの大木のなかを 歩 いている。(棕鳩十：6)

「歩く＋ている」は人の動作を表す。まず、動作を始めた時、「歩き始める」と言う。そして、動作が継続している時、「歩いている」と言う。「歩く」は人の動作で、足を動かすことである。

2. 雨が降っています。(鈴木：127)

「降る」は継続動詞の一つである。「降る＋ている」は動作の前に「が」が使われ、自然の現像を表す。

結果の状態動詞＋ている

1. 水が流れている。(牧野：520)

「流れている」は 水が流れることを表す。「ている」の形は継続していることを表す。「流れている」は水が動いていることを表す。

「水」は上流から下流へ流れている。

動作を表す動詞を用いて、その動作が結果の状態であることを表して、流れる＋ているの形で状態を表している。

3 ページ

2. 私はあなたを信じている。(牧野：531)

「信じる」は結果の状態の動詞である。「ている」の形は継続していることを表す。そして、「信じる＋ている」は人を信用していることを表す。

「信じる」は人を信用することを表していて、信用した結果の状態を「信じる＋ている」の形で表している。

結論

アスペクトは動作、状態が完了しているか、ないか、（完了と非完了）を示す文法範疇である。

「動詞のて形＋ている」の複合動詞は、アスペクトの形式の一つである。

「ている形」の基本的な用法は、動きの継続の状態を表す用法と、動きの結果の状態を表す用法がある。

動きの継続状態を表す用法は、動作が話している時点より以前に始まり、その時点でまだ動きが終結していない状態を表す用法のことである。

4 ページ

動きの結果状態を表す用法は、動作が話している時点より以前に終結し、動きの主体にその結果が残存している状態を表す用法のことである。

「ている形」が継続の状態を表す動詞には「歩く」、「鳴く」、「吹く」、「降る」、「浴びる」、「読む」、「思う」、「笑う」、「話す」、「食べる」、「勉強する」、「教える」、「使う」、「喜ぶ」、「踊る」などがある。

「ている形」が結果の状態を表す動詞には「残る」、「立つ」、「揺れる」、「覚える」、「行く」、「被る」、「着る」、「かける」、「帰る」、「座る」、「取る」、「会う」、「流れる」、「信じる」、「並ぶ」、「困る」、「言う」、「来る」、「止まる」、などがある。

「継続動詞＋ている」と「結果の状態動詞＋ている」の形は継続していることを表す。

継続の相を意味論的に分析した結果、以上の結論がわかった。